

【三重】

多気に墜落、最後の1人の身元判明 旧陸軍の「飛龍」搭乗者

2010年8月24日

「航空戦士散華之地」の石碑に刻まれた死者の名前。

「井口見習士官」は名字だけで、年齢も不明とされていた＝多気町車川で



戦後65年の夏、最後の1人が判明した一。第2次世界大戦中、多気町に墜落した旧陸軍浜松基地の重爆撃機「飛龍（ひりゅう）」の搭乗者8人の中で、慰霊の石碑を建てた地元住民たちが唯一、身元を把握できていなかった「井口見習士官」のめいの吉野美緒さん（44）＝千葉市＝から「自分の伯父です」と連絡が届いた。

「飛龍」は1945（昭和20）年5月22日未明、硫黄島から浜松へ帰還途中、多気町車川（くるまがわ）の通称「弓部（ゆんべ）山」に墜落。搭乗した8人全員が死亡した。

地元では1990年ごろから住民らによる慰霊祭が営まれるようになり、山中に建てられた鎮魂碑周辺を整

備していた住民たちは、各遺族と交流。しかし、手を尽くしても「井口見習士官」の遺族とは接触できなかった。

2003年、住民たちはふもとの県道脇に「航空戦士散華之地」という石碑を新たに建立。7人は氏名、階級、出身地と亡くなった年齢が刻まれたが、「井口見習士官」は「新潟県出身」とあるものの、フルネームは分からず、年齢も「不明」とされた。

だが車川地区の元区長、寺村龍介さん（69）らはあきらめず、「最後の遺族がいつでも現場に行けるように」と、毎年、命日の慰霊祭を続けながら墜落現場にある鎮魂碑までの登山道を整備し、周辺の清掃も続けてきた。

「8人の中に私の伯父がおります」。今月12日、インターネット上で偶然、寺村さんたちのホームページを見たというめいの吉野さんから、寺村さんにメールが送られてきた。「毎年慰霊してくださっているなんて。本当にありがたい話です」と感動の言葉が記されていた。

「井口見習士官」は学徒出陣し、22歳で亡くなった新潟県魚沼市出身の井口信介さんと判明した。吉野さんの父拓夫さん(80)＝同県魚沼市＝が弟だという。

実は、井口さんの父母が1957(昭和32)年ごろに多気町を訪れていたことも分かった。墜落現場にも登り、機体の残骸(ざんがい)を持ち帰ったというが、地元の人たちに、しっかり伝わっていなかった。

寺村さんらは「やってきたことは、無駄じゃなかった」と感慨を込める。なるべく早く石碑を書き換えるつもりだ。お盆に帰省した吉野さんは拓夫さんと話し、「来年5月の命日には現地へ行って、地元の方にお礼を言おう」と決めた。

(戸川祐馬)